



古田 幸子さん

Furuta Sachiko

〔岩下二区〕

ふるた・さちこ / 俳人。公民館自主講座「肥後同人俳句会」で活動。6月、第5回淡成社淡成居俳句大会で、「後藤是山記念館賞」を受賞。

人との出会いと四季の移ろいを 心で楽しむ五・七・五の調べ

「3月の大震災が発生した直後、テレビで流れ続ける映像を見て、被災地のことや被災者の皆さんのことを思う気持ちを俳句に詠みました」と語るのは、肥後同人俳句会の古田幸子さん。未曾有の災害となった「東日

本大震災」での被災者に対する思いを込めて作った句である。被災地に物資早くと祈る春が、第5回淡成社淡成居俳句大会で、選者が特別に選定する「後藤是山記念館賞」を受賞。「地震と津波によって、何も

なくなるほど流されてしまっただけで一つで避難している人たちへの思い」を五・七・五の韻律に乗せて詠んだ句。「食べ物や着る物もなく、さぞかし不自由さを感じているのだろうと。自分も高齢で体が不自由になっているから、避難所の皆さんの苦しさや大変さはいかほどなのかと心配しています」と自分の身に置き換えた気持ちを定型詩で表現し、被災地への願いを余韻に残す。

俳句を詠む上で、「人と出会って話をしたり、外に出て季節の景色を見たりして感じたことを題材にして詠み、推敲（すいこう）を重ねることが大切」と考える古田さん。受賞した句は、「自分自身の目ではなく、テレビで見た映像だったので、題材として適切だろうか」と詠むことをためらったが、指導を受ける先生から「今の思いを大切に詠んでいい」とのアドバイスを受けて練り上げた。

同俳句会に参加し始めて、およそ10年。「紙と鉛筆があればできる『ほけ予防』で始めた俳句は、「心に残る風景や気持ちを表現し、五・七・五の短い詩の中で、どんな順番で言葉の調べをつなぐといいのか、ということにいつも悩みます」と奥が深い。「難しいなと思う反面、詠んだ句をほめられると、うれしくて、さらにやる気がわいてきます」と笑みがこぼれる。これからの活動について「月2回、会のみんなで集まって、字を書いて言葉を考えて、お互いに話をして楽しく過ごすのが生きがいです」と声も輝く。